東海学園大学教育研究紀要　第６号：94-106，2021

〈授業報告〉

「特別の教科　道徳」道徳教科化への対応（3）
ーゼミにおける模擬授業（中学校道徳科）の取組みを中心にしてー

矢田貞行 *

はじめに

道徳教科化については、小学校ではすでに平成 30 年度から、中学校では平成 31 年・令和元年度から始められている。これに対応して筆者のゼミにおいても、専門演習Ⅱ（3 年次秋学期）の時間を利用して、道徳科の教材研究･学習指導案の作成を行い、主として 1、2 年次の演習において 3 年生が教師役を務め、彼らを児童生徒役に見立てて模擬授業を実施している。前稿（『教育研究紀要第 5 号』）においては、主として小学校の道徳教科化に関する報告を行ったので、本稿では、令和元年度秋学期「専門演習Ⅱ」における中学校道徳科に対応した模擬授業について、報告を行うことにする。

Ⅰ.「特別の教科　道徳」の授業づくり

上述のように、中学校ではすでに「特別の教科　道徳」が始められ、学校現場では、これまで培われてきた道徳の授業実践に基づきつつも、新たな道徳科の教科書を用いた教科としての授業が行われてきている。道徳科の授業は主として担任教師が行うとされており、教育実習においても実習生の多くに道徳科の研究授業が課されるなど、求められる教員の資質能力の 1 つとして学校現場でもその指導力が重視されていることは言うまでもない。

そこで本ゼミにおいては、中学校の教員志望の学生（5 名）に中学校道徳科の模擬授業を行うことを求めた。まず、ゼミの開講時に「特別の教科　道徳」新設の経緯やその意義、指導上のポイント等を踏まえて、中学校道徳科における学習指導案の立て方について講義を行った。その後、学生が各自で教材研究を行い、学習指導案を作成した。

その際、本ゼミにおいては、教師用指導書を予め学生に見せ、それを参考にして学習指導案を作成することを勧めている。学生たちは、すでに 2 年次の道徳指導法の授業において、学習指導案の立て方について履修しており、ある程度その概要に関しては周知している。また、本ゼミにおける専門演習のねらいは、学習指導案作成自体が目的ではなく、教科化された道徳科の授業を、どのように教師として生徒を前に限られた時間内で行い、実践力を培うかを重視しているからである。

模擬授業の直前に学生と打合せを行い、学習指導案に基づく授業デザインの提示、板書計画に基づくフラッシュカード等を用いた板書の試行、授業展開のポイント、留意事項の確認、グループワークの構想等について、詳細な予行演習を行った。

Ⅱ. 学習指導案の作成

次に、模擬授業を行った学生の事例を取り上げることで、中学校における教科化された道徳科の一端

* 東海学園大学スポーツ健康科学部

を紹介することにしたい。ここで例示する学生の学習指導案は、中学校２年生の道徳科（「私は十四歳」『われら中学生』文英堂、平成 10 年）を教材としたものである。

この授業では、「個性をよりよい方向に伸ばし、より輝かせようという自分（主人公）の人生への前向きな取り組みを繰り返す中で、充実した生き方を体得させる」（「主題設定の理由」）ことをねらいとしている。また、「自分を肯定的に捉え、自分の優れている面の発見に努め、さらに伸ばしていこうとする意欲を育てる」（同上）ことを重視している。

ところで、本時の単元の主題名は「向上心」「個性の伸長」である。思春期にある中学生が、試行錯誤を繰り返しながら「新たな自分に出会うためのチャンス」（同上）と捉え、「後悔のない生き方をしたいという意欲を育てることがより充実した生き方につながっていく」（同上）ことを生徒に自覚させる契機となることが、授業の目標である。

本教材は、部活動に関して思い描いている理想の自分と現実の姿のギャップに悩む主人公「私」の不安や葛藤が描かれており、それは 14 歳の中学生の「自分探し」でもあり、「自分磨き」でもある。生徒たちには、自分自身の体験に照らし合わせて活発に話し合い、議論を深めて自己を見つめ、自分らしい生き方を追求しようとする意欲を育てたい、という意図を持って授業担当者は授業を構想している。

なお、評価の視点については、自己を見つめ、自己のよさを生かし伸ばしていくために前向きに取り組むことの意義に気づき、そのことで自分の見方や考え方を深めているか否かを評価の基準としている。また、評価の方法としては、中心発問（「私が悩む中でジャズダンスに出会えたのは、どんな気持ちを持ち続けていたからか」）におけるグループ間での話し合いや、自分のよさを生かし、前向きに生きていこうとする姿勢について、生徒各自が「ワークシート」に記載した内容に基づいて評価を行おうとしている。

以下、学習指導案は表１及び２、授業で使用したワークシートは表３、板書計画は図１に示す通りである。

表 1. 学習指導案（その 1）

第２学年〇組　道徳学習指導案

令和元年 12 月２日（月）第２時限目

男子〇名　女子〇名　計〇〇名

場所　425 教室

指導者　□□□□

１．主題名　向上心、個性の伸長

２．資料名　私は十四歳（出典：われら中学生＜平成 10 年＞）

３．主題設定の理由

（１）ねらいや指導内容について

これまでや現在の自分、そして将来こうありたいという自分を見つめ直していく中で、向上心が起こってくる。また、人それぞれに必ずその人の固有のよさ、独自性がある。この１人１人の持ち味とも呼べるものが、個性である。それをよりよい方向に伸ばし、より輝かせようという自分の人生への前向きな取り組みを繰り返す中で、充実した生き方が体得されるのである。

（２）生徒の実態について

この時期の生徒は、自己理解が深まり、自分なりの在り方や生き方について関心が高まってくる。しかし、理想の自分の姿を思い描いてそれに近づきたいと願う一方で、その理想とうまくいかない現

実とのギャップに１人思い悩むことも少なくない。また、周りの人の目が気になるというこの時期の大きな特徴も関わり、個性を伸ばすことに消極的になったりすることもある。

価値ある自己の実現に向けて模索する中で、教材の中で作者が示しているように、不安や悩みを「新たな自分に出会うためのチャンス」と捉え、「後悔のない生き方」をしたいという意欲を育てることが、より充実した生き方につながっていくことを生徒に自覚させたい。

（３）教材について

中学校に入って、どの部活動を選ぶか、部活動と勉強とは両立できるのか、何らかの支障があった場合、部活動をやめる決心がつくかなど、部活に対する生徒の関心は極めて高い。この教材は、部活動に関して思い描いている理想の自分の姿のと、現実の姿とのずれに悩む「私」の不安や葛藤が描かれた生徒の作文であり、共感しやすい。14 歳の少女の悩み、苦しみ、迷い、決断、希望などが率直に述べられている。「自分探し」の過程が描かれ、最終的に「自分磨き」ができるものを見つけさせられた「私」の姿に、自分の姿を引き寄せて考えさせたい。自分自身の体験に照らし合わせて活発な話し合いを行い、それを通して自己を見つめ、自分らしい生き方を追求しようとする意欲を育てたい。

４．評価の視点

自分を見つめ、自分のよさを生かし、さらに伸ばしていくために前向きに取り組むことのよさに気づき、自分の見方、考え方を深めていく。

５．評価の視点

自己を見つめる発問におけるグループ間での話し合い、及び自分のよさを生かし、前向きに生きていこうとする姿勢に基づく。

表 2. 学習指導案（その 2）

	学習の流れ	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	❶部活動について話し合う。 Q1. 部活動（またはスポーツ団体）に参加しているか。部活動をやっていてよかったと思ったとき、やめたいと思ったときは、どのようなときか。	○体力がつき、精神面で強くなったと感じたとき。 ○新しい友人ができたとき。 ○練習のメニューがきついとき。 ○人間関係がうまくいかないとき。 ○勉強との両立が難しいと感じたとき。	前半での「私」の悩みを共感的に捉えるための話し合いだが、導入であるので簡単に扱う。

展開	❷「私は十四歳」を読んで話し合う。 　教科書を朗読する。		入学時は希望に胸を膨らませていたが、次第に気持ちが変化していった「私」の状況を押さえる。
	Q2.「私」は、バスケット部をやめたとき、どのようなことを考えたのか。	○友人がいなくなって淋しい。 ○自分の好きなことを見つけ出し、頑張っている人はいいな。 ○何で自分は、無力なんだろう。 ○自分のやりたいことは、何だろう。	バスケット部で活躍している理想の自分の姿と、うまくいかない現実とのギャップに悩む「私」の姿に共感させたい。 　気持ちが前向きに変わっていく「私」の心情に寄り添う。
	Q3. ジャズダンスに出会って、「私の中で、何かが変わり始めた」とあるが、何が変わり始めたのか。	○やりたいことが分からず、もやもやしていたけれど、自分のしたいことはこれかな？と思えるようになった。	本文の記述以外に、「私」の思いを自分の言葉で表現させたい。 　悩んだり、不安な気持ちを抱えたりしつつも、自分らしさを追い求め続けた「私」を支えた考え方に気づかせたい。
	Q4. 悩む中で、ジャズダンスに出会えたのは、「私」がどんな気持ちを持ち続けていたからか。(☞中心発問) 　ワークシートに自分の考えを書く。	○自分のよさや、やりたいことを諦めずに探し求める気持ちがあったから。 ○自分のやりたいことをやろうという前向きな気持ちから。 ○新しいことに挑戦して、新しい自分を見つけたい気持ちから。 ○本来の自分を取り戻したいから。	自分のこととして、考えるという視点を示す。 　グループで出されたさまざまな考えを１つにまとめる必要はない。 　他の生徒の考えを聴き、自分の考えと比べたりすることで、自分の考えを広げたり深めたりする。

	❸自分らしい生き方をするために大切なことを話し合う。 Q5. 自分らしい生き方をするためには、どういったことが大切かを考える。 考えをグループで議論し、出た意見を画用紙に書く。 　グループごとに発表する。	○「私」のようにくじけないで前向きに物事を考える。 ○心が折れそうになっても、決して諦めない。 ○自分のやりたいことや、熱中できることを見つけて楽しむ。 ○自分の好きなことを全力でやる。 ○自分の気持ちに素直になる。 ○勇気を持って挑戦する。	
終末	❹本時のまとめをする。 　説話を聴く。 　今日の学習を通して学んだこと、考えたことをワークシートに記入する。 　今日の学習をふりかえり、ノートに書く。	○自分の過ちに拘って落ち込むのも、逆に自分を庇い過ぎるのもよくない。とにかく前を向いていく姿勢が大切である。	教師の「自分探し」の経験を話す。あるいは、本時のねらいに合った適切な「詩」があれば紹介することで、まとめとする。

表３．ワークシート

私は十四歳

組　　番　　氏名

◆思い悩む中で、ジャズダンスに出会えたのは、「私」がどんな気持ちを持ち続けていたからか。

自分の考え	友達の考え

◆今日の授業の感想を書こう！　（学んだこと、考えたことなど）

……

……

……

……

◆ふりかえってみよう！　A~D のいずれかを〇で囲む。

A：意欲的にできた　B：できた　C：あまりできなかった　D：できなかった

１．自分の考えを伝えることができたか。

【　A　B　C　D　】

２．友達の考えを聴くことができたか。

【　A　B　C　D　】

図１．板書計画

「今」を生きる私たちのために

私は十四歳

入学　＋頑張ろう

バスケット部入部　＋いい気分

気持ち ↙

退部　－自分のやりたいことは？

－頑張っている人はいいな

ジャズダンスとの出会い

気持ち ↖

私の中で何が変わり始めたのか

悩む中でジャズダンスに出会えたのは、どんな

気持ちを持ち続けていたからか

自分らしい生き方をするためには

Ⅲ．授業の実施とふりかえり

模擬授業を終えて、最後に生徒役の受講生（1年生及び3年生）からのコメント（「よい点」「改善すべき点」）を集約し、『みんなの声』（表4）としてまとめたものを次週の授業において配布することにしている。なお、「感想」については、教員が書いたものを記載した。

表4.『みんなの声』（その1）

みんなの声

【よい点】

授業前から生徒役の学生と歓談し、名前を覚える等人間関係の構築に努めている。☞授業を行うに当たって、教師と生徒の信頼関係はとても重要であり、円滑な授業を進めるためには、必須の事項であり、授業者はこのことをよく心得ている。

導入部で部活について考えさせる際、部活のよさや楽しさなど、明るい雰囲気で笑顔で生徒に語りかけている点が頗る好感が持てる。生徒も笑いで対応している。

教科書を範読し、机間巡視をしながら行っている。

主人公の人物の確認を行っているが、中学校入学時の清々しい気持ちやがんばろう!という心意気を生徒（中2年生）にも思い起こさせるような雰囲気づくりに努めている。

次のバスケット部退部の所でも、その所為か主人公の気持ちに寄り添い、核心に迫るような回答が寄せられている。また、「退部」というマイナス面ばかりを出すのではなく、「自分自身を取り戻す…」「これまでとは違う自分に挑戦する…」という前向きな方向性を主人公があくまでも指向していることを把握した、心境の変化（「モヤモヤ感がなくなった」「思い描いた自分近づいている」「表現する楽しさや喜び…」）を的確に捉えた指導をしている。

【改善すべき点】

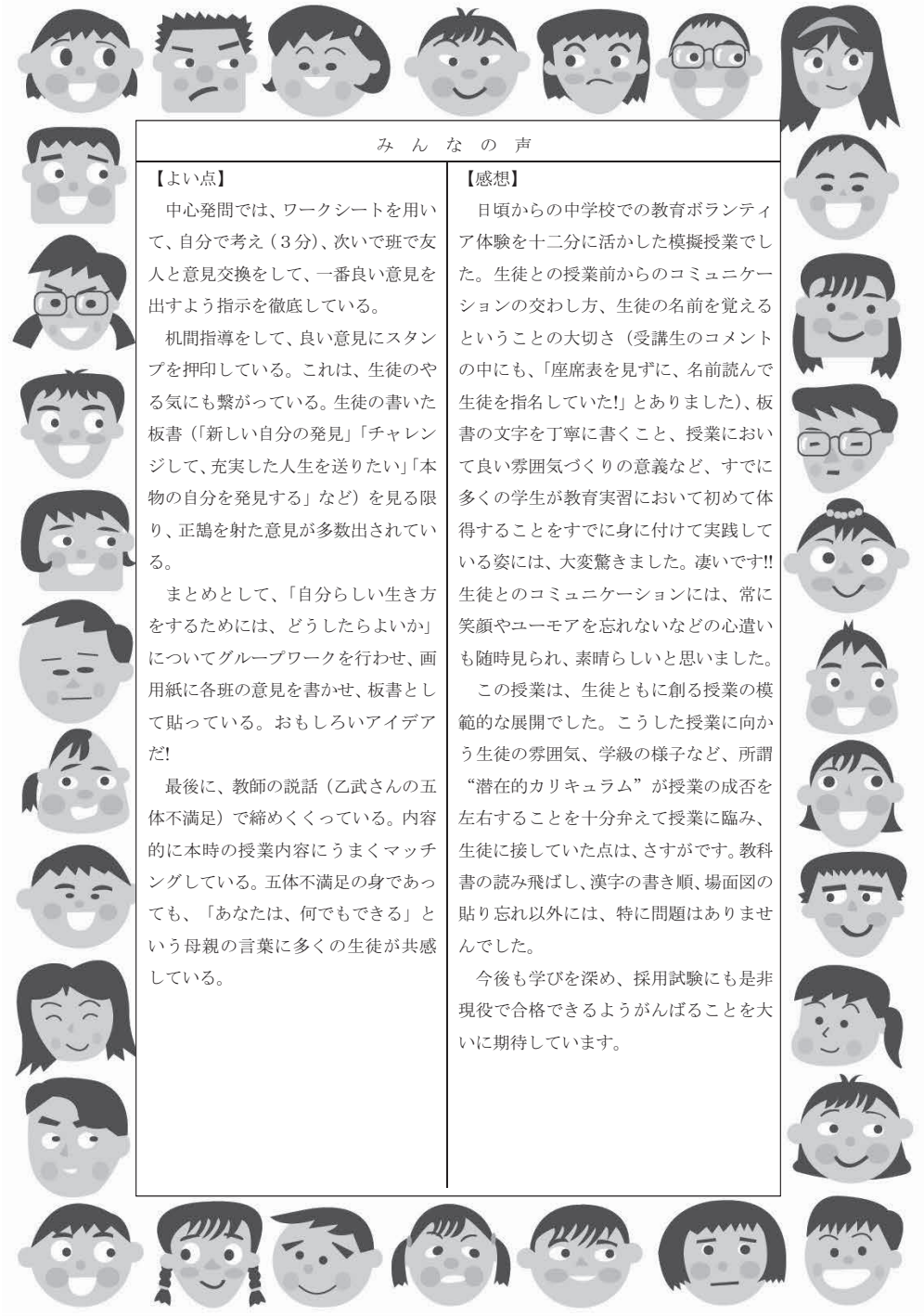
場面図を貼り忘れて、後でこっそり貼っていた。生徒にはうっかりしていたことを正直に謝罪した方がよい。

漢字の書き順に注意してほしい。

範読の際、読み飛ばしが見られた。

プラスの意見のみならず、マイナスの意見も作ってあるとおもしろいと思った。

表４.『みんなの声』（その２）



みんなの声

【よい点】

中心発問では、ワークシートを用いて、自分で考え（３分）、次いで班で友人と意見交換をして、一番良い意見を出すよう指示を徹底している。

机間指導をして、良い意見にスタンプを押印している。これは、生徒のやる気にも繋がっている。生徒の書いた板書（「新しい自分の発見」「チャレンジして、充実した人生を送りたい」「本物の自分を発見する」など）を見る限り、正鵠を射た意見が多数出されている。

まとめとして、「自分らしい生き方をするためには、どうしたらよいか」についてグループワークを行わせ、画用紙に各班の意見を書かせ、板書として貼っている。おもしろいアイデアだ!

最後に、教師の説話（乙武さんの五体不満足）で締めくくっている。内容的に本時の授業内容にうまくマッチングしている。五体不満足の身であっても、「あなたは、何でもできる」という母親の言葉に多くの生徒が共感している。

【感想】

日頃からの中学校での教育ボランティア体験を十二分に活かした模擬授業でした。生徒との授業前からのコミュニケーションの交わし方、生徒の名前を覚えるということの大切さ（受講生のコメントの中にも、「座席表を見ずに、名前読んで生徒を指名していた!」とありました）、板書の文字を丁寧に書くこと、授業において良い雰囲気づくりの意義など、すでに多くの学生が教育実習において初めて体得することをすでに身に付けて実践している姿には、大変驚きました。凄いです!! 生徒とのコミュニケーションには、常に笑顔やユーモアを忘れないなどの心遣いも随時見られ、素晴らしいと思いました。

この授業は、生徒ともに創る授業の模範的な展開でした。こうした授業に向かう生徒の雰囲気、学級の様子など、所謂“潜在的カリキュラム”が授業の成否を左右することを十分弁えて授業に臨み、生徒に接していた点は、さすがです。教科書の読み飛ばし、漢字の書き順、場面図の貼り忘れ以外には、特に問題はありませんでした。

今後も学びを深め、採用試験にも是非現役で合格できるようがんばることを大いに期待しています。

『みんなの声』として、受講生から寄せられた「よい点」としては、次のようなものが挙げられている。

まず、授業前から生徒役の学生と歓談し、名前を覚える等人間関係の構築に努めている点である。授業を行うに当たって、教師と生徒の信頼関係はとても重要であり、円滑な授業を進めるためには、大切な事柄であり、授業者はこのことをよく心得ている。

次いで、導入部で部活動について考えさせる際、部活のよさや楽しさなど、明るい雰囲気で、笑顔で生徒に語りかけている点が頗る好感が持てる、生徒も笑顔で対応している、というコメントも多数寄せられており、授業者が生徒との打ち解けた良好な関係を築いて授業に臨んでいることが窺い知れる。また、教科書を範読し、机間巡視をしているときも、生徒の様子を常に視野に入れながら授業を進めていることに余念がない。こうして授業者は、生徒の動機づけを殊の外重視し、生徒を学習者の中心に据えた授業展開に努めていることに他ならない、と言えよう。

教科書を一読の後、展開部では主人公の人物の確認を行っているが、ここでも中学校入学時の清々しい気持ちで頑張ろう！という心意気を生徒（中２年生）にも思い起こさせるような雰囲気づくりに努めている。

逆に、次のバスケット部退部の箇所でも、その所為か主人公の気持ちに寄り添い、核心に迫るような回答が寄せられている。また、「退部」というマイナス面ばかりを出すのではなく、「自分自身を取り戻す」「これまでとは違う自分に挑戦する」という前向きな方向性を主人公があくまでも指向していることを把握した、心境の変化（「モヤモヤ感がなくなった」「思い描いた自分近づいている」「表現する楽しさや喜び」）を的確に捉えた指導をしているのである。

また中心発問では、ワークシートを用いて自分で考え（3分間）、次いで各班（グループ）で友人と意見交換をして、一番よい意見を出すよう指示を徹底している。その際、机間指導を行ってよい意見にスタンプを押印している。このパフォーマンスは、押された生徒が喜び、生徒のやる気にもつながっている。

まとめとして、「自分らしい生き方をするためには、どうしたらよいか」についてグループワークを行わせ、画用紙に各班（グループ）の意見を書かせ、板書として貼っている。これもまた、“自分ならどうするか”を問う、教科化された道徳科の核心に迫る適切で、興味深いアイデアだと言えよう。生徒が前に出て書いた板書（「新しい自分の発見」「チャレンジして、充実した人生を送りたい」「本物の自分を発見する」など）について見る限り、正鵠を射た意見が多数出されているというコメントが多数寄せられていた。

最後に、教師の説話（乙武さんの『五体不満足』）で締めくくっている。これは、内容的に本時の授業内容にうまくマッチングしている。五体不満足の身であっても、「あなたは、何でもできる」という母親の言葉に多くの生徒が共感していることが垣間見れる。

なお、「改善すべき点」としては、場面図を貼り忘れて、後でこっそり貼っていたことが指摘されている。生徒には、教師がついうっかりしていたことは正直に謝罪した方がよい。この他、漢字の書き順に注意してほしい、範読の際、読み飛ばしが見られた、といったことも挙げられており、事前の打ち合わせや予行演習の段階において用意周到な準備が求められる所である。さらにまた、プラスの意見のみならず、マイナスの意見も作ってあるとおもしろいというコメントも見られた。

おわりに、筆者自身のこの授業についての感想について述べておきたい。授業者は、日頃から中学校での教育ボランティア体験を積んでいるが、その成果を十二分に活かした模擬授業であった。生徒との授業開始前からのコミュニケーションの交わし方、彼らの名前を覚えるということの大切さ（受講生のコメントの中にも、「座席表を見ずに、名前読んで生徒を指名していた」）や、板書の文字を丁寧に書くこと、授業において良好な雰囲気づくりの意義など、すでに多くの学生が教育実習において初めて体得することをすでに身に付けて実践している。また、生徒とのコミュニケーションには、常に笑顔やユーモアを忘れないなどの心遣いも随時見られ、このようなパフォーマンスについても、大変素晴らしいと

感じた次第である。

ともかく、この授業は生徒とともに創る授業の模範的な展開であり、こうした授業に向かう生徒の雰囲気、学級の様子など、所謂“潜在的カリキュラム”が授業の成否を左右することを十分弁えて授業に臨み、生徒に接している点は、称賛に値すると言えよう。また、教科書の読み飛ばし、漢字の書き順、場面図の貼り忘れ以外には、特に問題はなかったことも事実である。今後も中学校でのボランティアで学びを深め、教員採用試験にも現役で合格できるよう頑張ることを大いに期待する感想を記載して締め括った。

おわりに

模擬授業を行った学生からは、授業時に撮影したDVD に基づいて、ふりかえりとしてレポートを作成することを課している。本授業を行った学生から、次のような内容のレポート（表5）が提出されているので、併せて掲載しておきたい。

今回、道徳教科化に向けての模擬授業を行うに当り、授業者側の学生が重視した点は（1）綿密な教材研究、（2）授業の雰囲気づくりである。

表5. 模擬授業を行った学生のレポート

専門演習Ⅱ　課題レポート

模擬授業を終えて

S117○○○　□□□□

専門演習Ⅱで、道徳の模擬授業を大学１年生を相手に行いました。今回、模擬授業をするに当って、決めたことが２つありました。

１つ目は、事前準備、教材研究を時間かけて行うということです。道徳の授業では、フラッシュカードや挿絵を使う場合が非常に多いです。今回挿絵は、矢田先生が準備してくださいました。フラッシュカードは、作るのにたくさん時間を使います。１度フラッシュカードを作り、実際に黒板に貼ってみました。見にくくはない字の大きさではありましたが、自分の中で今回事前準備や教材研究は時間をかけて行うのが本授業のモットーの１つでもあったので、もう１度フラッシュカードを作り直しました。黒板に貼ってみて見ると、前回よりも明らかに見やすくなりました。作り直しているときはあまり気分が上がるものではなかったのですが、自分が決めたことをやりきれたのはよかったです。雑に授業をするのは簡単ですが、生徒にとっては一生に一度しかない授業なので、教員になってからも抜け目ない事前準備をしていきたいです。教材研究に関しては、「十四歳の私」を熟読し、的確に内容を押さえました。そして、何よりも大切にしたのは、教師の説話です。どのようにしたら「十四歳の私」に関連付けた内容で生徒に説得力ある話をできるか、ということを考えました。そこで、乙武さんの話にたどり着きました。最後の教師の説話は、矢田先生や授業を受けてくれた学生からも称賛の声が非常に多かったです。やはり事前準備もそうですが、教材研究も時間をかけた分だけよい授業になるな、と身をもって分かりました。

２つ目は、中学校の教育ボランティアで学んだことを生かすということです。僕は、ボランティアで何を大切に過ごしているかというと、生徒とのコミュニケーションです。また、その生徒に応じた接し方にも気を付けています。特に中学生を相手に授業をする際に大事なことは、いかに生徒を授業に引き込ませることができるかだと思います。生徒を授業に引き込ませるには、その前に生徒とコミュニケーションを取り、信頼関係を築き、よりよい環境づくりをできているかに限ります。だから、模擬授業前に接点のない大学１年生の名前を短時間で覚え、質問の時間を設けました。実際に、とてもやりやすい雰囲気で模擬授業を行うことができました。

これから教員になり、何回も授業をしていく中で、僕が意識した２つを確実に行えれば、失敗することはないのかなと思いました。

まず（1）については、授業者自身春学期に中学校の保健の模擬授業を体験しており、その際の反省から生まれた教訓であると推測できる。生徒に理解してもらえるような授業を構想するためには、誰もが理解できる授業のグランドデザインをまず立てることが重要である。そして、それを分かりやすく提示するためには、教材を何度も読み込み、理解を深化させていくことは言うに及ばず、生徒の視点に立脚した授業の展開を構想して学習指導案に盛り込むことが肝要である。学生自身が述懐しているように、教材のポイントを的確に押さえ、特に道徳教育では終末の教師の説話をどのような内容にして生徒の心に響き、１人１人の道徳性の進展に資するかが、授業の成否を握っていると言っても過言ではない。

次いで（2）については、『みんなの声』でも述べたように、学習への導入がすでに授業の始まる前からスタートしているのであり、中学校のボランティアで培った授業者の経験が十分に反映されたものであった。とりわけ、授業が教師対生徒、生徒同士のやり取りで展開する以上、教師が生徒１人１人の名前を知っており、彼らがどのような性格であり、どんな人物なのかを熟知しているのが、授業成功の鍵であることを学生自身が事前に体得していたことは称賛に値する。

このように、学校現場における学びを踏まえた模擬授業は、例年になくレベルの高い内容であったことは事実であり、以下に述べる生徒役を務めた主として１年次の学生からの感想にも如実に窺い知ることができる。授業を受けた学生からは、次のようなコメントが寄せられている。

1. 学生 A

先輩方の模擬授業を受けてみて、将来の教師像をイメージすることができました。…（中略）…私が実際に先生になったら、しっかり声を張って説明を分かりやすくできる人になりたいです。そのためには、正しい知識や自信が必要だと思います。今からできることは、積極性を大切にすることだと思います。そして、何事にも興味を持って挑戦することで成長できるはずなので、これからこうした点に常に意識していきたいです。

先輩の先生方の教え方は一様ではなく、その人なりの個性や工夫を凝らして生徒にどれだけ興味を持ってもらい、理解を深めていこうとするものでした。これまでの人生でたくさんの先生に出会い、授業を受けてきましたが、楽しいと思える授業はやる気や興味を持って取り組めました。これらは、すべてこれまで教えていただいた先生のお蔭だと思います。苦手だった数学も先生の教え方がよかったため、毎週授業が楽しく、点数が上がった経験があります。私が教師になったら、「先生の授業楽しい」と言ってもらえるように頑張りたいです。

2. 学生 B

模擬授業を受けて感じたことは、まず先輩方の凄さだ。自分も将来教員になりたいと思っているが、とてもあそこまで完璧な授業ができると考えにくい。その理由として、今の自分と先輩方とでは授業に対する自信が違う。おそらく自分があの場に立ったら、緊張で何もできない。しかし、先輩方はたくさんの人の前に立ち、緊張なく授業を熟せるのは、先輩たちに自信があるからなのではないかと思う。

これから自分がやって行こうと思ったことは、まずたくさんの人の前で話すことに慣れることである。今の段階では、大勢の人の前では緊張してうまく話せなくなってしまうので、これからの授業やゼミの場で機会を見つけ、積極的に話すことに努めたい。

他方、自分の意見に自信を持てるようになることも大事だと感じた。模擬授業の時にもそうであったが、現時点の自分は自分が出した意見に自信が持てず、相手の意見に流されてしまうことが多かった。しかし、授業をする立場の人間が自分の意見に自信を持てなければ、授業に説得力がなくなる。今後自分の意見を言う機会があれば、相手の意見を尊重するのは勿論だが、自分の意見を相手にしっかりと伝えることを心掛けたい。

今回の模擬授業で、自分はとても多くのことを学ぶことができた。今度自分が授業するときは、後

輩から学ぶことが多い授業であった、と言ってもらえるような見本を示したい。

3. 学生Ｃ

先輩方による授業は、どの授業も楽しく、単純に凄いなと感じました。…（略）…□□先生は、授業を行う前から積極的に生徒と話していました。そのことにより、スムーズに授業が始まっていたと思います。グループワークの際には、全員で意見交換をして考える時間があったので、他人の考えを聴き、自分の考え方の幅も広がるのでとてもよかったです。…（略）…同じ教員を目指している人として、身近にこうなりたいと思う目標ができてよい機会でした。

4. 学生Ｄ

模擬授業は、中学校や高校での授業とは異なり、別の視点で受けることができた。授業をどのように進めるか事前に分かっていて、授業で勉強を学ぶのではなく、評価をすることは今までなかったので、とても新鮮な気持ちで体験することができた。

授業を評価するという点では、普段の授業といくつか異なることがあった。それは、授業を受ける姿勢が自然と能動的になることだ。普段の授業では、聞いているだけになることが多く、受動的になりやすいが、評価する側になることでどのような授業をしているのか理解するために、自然と能動的になっていた。また、グループに分かれて話し合いの機会を作ることで、普段発言しにくい人でも意見を伝えやすい場になっていた。黒板にグループでまとめた意見を書いて先生側からその意見について質問したり、挙手で考えを発表するだけでなく、様々な方法で自分の気持ちを表現することができた。

さらにもう１つ、模擬授業を受けて気づいたこともある。それは、授業中に挙手することの大切さである。特に今回の道徳では、自分がどのように感じたのかを外に表現することが大切であり、そうでないときとは授業で大きく得られるものは違ってくる。授業で挙手を通じてはっきりと自分の意見や考えを表現する積極性の意義について、今回特に体験できる非常によい機会であったと思う。

以上のように生徒役の学生からは、多岐にわたる観点から感想が寄せられているが、いずれの感想も模擬授業のレベルの高さに驚愕の念を表わしている。4 名の１年生は、いずれも教職を志望しているが、この授業から得たこと、そしてそれを今後の学修に活かしていく旨を具に語っている。この模擬授業は、異学年の学生がそれぞれ教師役と生徒役に分かれて学ぶという教育効果やそのインパクトも計り知れないことを例証している。こうした取り組みについては、先輩の教職履修から学ぶという効果も生んでいることも最後に付け加えておきたい。

参考文献

「新しい道徳」編集委員会編『新しい道徳 2 教師用指導書　研究編』東京書籍、平成 31 年。

本時の資料（付録）

「今」を生きる私のために

私は十四歳

私は十四歳。部活は去年の夏にやめた。

期待と希望に胸をふくらませて入った中学校だった。先輩がとても大きく見え、自分も大人になったようで、いい気分だった。

小学校から続けていたバスケットを、当然のことのように続けるつもりで入部した。しかし、その三か月後に、私にとって大きな転機が訪れたのだ。

私がバスケットを始めたのは、小学校四年生のとき、友達につられて何気なく入ったというのがきっかけだった。そのころのバスケット部は市内でも弱いチームで、勝敗より楽しいボール遊びをするといった感じだった。それが、バスケットを指導する先生が転任してこられて、きたえられ、六年生のときには市内でベスト8という成績を収めるほどになった。私は、ポイントゲッターの五番の背番号を付けていた。苦しいことを乗りこえての勝利のうれしさを、実感できる毎日だった。

友達といっしょにあせを流したり、たがいに支え合い、泣いたり笑ったりした。その中で、集団の一員としての自分の立場やチームワークから生まれる真の友情を学んでいた。楽しい思い出と充実感をあたえてくれる最も自分らしい時間だった。

ところが中学でのバスケットは、想像以上にきつかった。勉強との両立ができない。スターティングメンバーにもなれない。つらい練習は、自分のプラスになるどころか、失うもののほうが大きなっていくような気がした。

自信が少しずつうせ、つかれた心と体の中で、むなしさがつのり、何のためにバスケットをやっているのだろうと、漠然と考えるようになった。どうしたらよいか、答を見つける余裕もなかった。自分を取りもどすための時間が欲しかった。

迷ったけれど、バスケットをやめることにした。気がつくと、今までいつも周りにいた友達が一人もいなくなって、学校でも一人で行動することが多くなった。とてもさびしい日々が続いた。

私は、これだけはだれにも負けない、というものをもっている人にあこがれる。自分の好きなことを見つけ出し、頑張っている人をいいなあと思う。私は今まで、運よくいろいろな賞をもらってきた。でも、それらは、親や先生の力を借りて得たものだった。たくさんのことを少しかじっているけれども、私の中にかくれている本物の力を出していなかったように思う。中学生になっても、だれの援助もなしに満足に何もできない。無力な自分がそこにいたのだった。

二学期から自分に合った部活を探した。卓球部、ソフトボール部、バレーボール部……、仮入部させてもらったりもした。しかし、どれも自分の思いえがく部活ではなかった。有り余った体力とあせる気持ちを、毎晩なわとびやジョギングをすることでおさえていた。

鏡を見ると、私は、何をやっているのだろうという気がし、自分で自分をどんどんだめにしていくようで、こわかった。

二学期も終わり三学期を むかえても、何も始められなかった。あせる気持ちがふくらみ、なやんでいたが、あるとき、もっとちがうことに挑戦してみたいと思ってバスケットをやめたのに、部活にこだわって、しがみつこうとする自分に気づいた。やりたいことは何なのか！ 勉強、ピアノ、スポーツ、料理……、まだまだ果てしなくやってみたい新しいこと。それらは、学校の部活のわくにはいりきらないことが多かった。

時間がたつにつれ、今、新しいことを始めるのは、新たな自分に出会うためのチャンスなのではないかと、少しずつ思い始めていた。

それまでは、私がなやみ続けている間も、自分のやることに協力してくれていた両親が、

「部活をやめたことは決して負けたということではない。回り道をしているうちに、ほかのいろいろなことに出会えるかもしれないよ。」

と、公民館でやっているジャズダンスをすすめてくれた。体力には少し自信があったが、今までと全くちがう運動に、思うように動けずに戸惑った。でも、久しぶりに思いっきり体を動かし、今までのモヤモヤも少しずつ晴れていくようで、すがすがしい気持ちになった。

ダンスは、自分の体だけでなく指の先までも使って表現するもの。日頃、みんなの前でおどるなんてはずかしくて、体育祭のときだって照れていいかげんにやっていた。けれど、回を重ねるたびに、少しずつその振りと曲からくる自分のイメージや思いが出せるようになり、表現する楽しさや喜びが味わえるようになった。

私の中で、何かが変わり始めた。少しずつ私の姿が見えてきた。

十四歳。子供と大人の間の時代。

子供だけど、子供じゃない。大人じゃないけれど、大人みたいにふるまいたい。不安だけれども、学校があって、先生がいて、いろいろなことがあってよいのだと思う。

後悔のない生き方をしたい。自分がいちばん正しいと思った道を歩き、思いっきり生きたい。今風じゃないと言われてもかまわない。今だから、それができると私は思っている。

私は十四歳。今は、自分みがきでいそがしい毎日を送っている。いつか、かがやいている自分に出会うために……。